表門神社社記

《沿革》**創建**：人皇７代孝霊天皇の御代２年目(前２８８年)・今からおよそ2300年余り前の鎮座と伝えられる。

延喜式内社：醍醐天皇の時代(901～923年)に勅令を受けて編集された『律令の施行細則(９２７年撰進)の巻９・巻１０の**神名帳**に社名が記載されている。

近年祭(毎年陰暦２月４日)に幣帛を授かる宮中・京中・５幾７道(全国)の神社3,132座中の１座であった。山梨県内では20社が記載されている。**延喜式内社**

社殿：現在の社殿は、慶長１４年３月３日(１６０９年)に**徳川幕府によって寄進造営**されたもので、これを記念して現在は**4月第一日曜日に大祭礼**が執り行われている。その後元禄１１年(1698)、嘉永３年(1850)の修理を経て現在に至っている。

《由緒》**市川文珠の謂れ**：永保元年(1081)平安時代・第72代**白河天皇の時代**、主上がご不例となられた。その時上洛していた表門神社の神官が占いの名手としてその名を知られていたため請われて参内し、占いの上祈願したところたちまち平癒あそばされた。　このことをお喜びになられ、**『社殿・末社に至る51社』を御寄進**あそばされ、また**旧豊富村と旧市川大門町に『大鳥居』を建立**された。

大鳥居は現在では『字名』として残っている。

更に、神官に『空海(弘法大師)』の筆になる梵字(５個の呪字を繰り返す)の『文珠画像』をご下賜になった。この後**市川文珠**(表門の文珠ともいう)は、大和阿倍野文珠、天橋立切戸の文珠と共に日本三文珠として尊崇を集める事となった。

嘉保２年１０月(1095)**行部三郎義清**配流せられて**当所に居住し、当社(表門神社)を鎮守となし**、その節**『御崎大明神』を義清宅に迎え神楽を奉納する。**

以来１１月酉の日に**『御台所祭』**を催行する。

依って当社を**『甲斐源氏の産土神』**と申し伝えられる。

下って、**『武田信玄』**は甲斐の國の四方に鎮守を定めるに当たり**本社『表門神社』を南方の鎮守と定め**、『冑の前立不動』を寄進し神領を増す。

『徳川家康』甲斐入国の節、天正十年(1582)３月３日**当社に本陣を置き**、武軍長久の祈願をなし、長く社殿の造営修復の儀を誓った。(依って**御陣場御宮**とも称した)　慶長１４年３月３日第一回の社殿造営成る。

時の奉行は河野弥五衛門、岩波七郎右衛門なり。　後数回修復あり。徳川幕府最後の修復は嘉永３年(1850)１１月。市川の代官

荒井清兵衛、元世話方、会計　市川大門村長　百姓渡邊権五右衛門氏であった。

《市川御崎大明神》表門神社

御崎明神社殿は江戸初期、徳川幕府の寄進による造営で**権現造り**であり、

本殿・拝殿・庁屋(現拝殿)・神楽殿・随神門・赤鳥居・石鳥居とからなる。

御輿屋、参籠所、御供所、裏門は滅失。

《御祭神》

中殿：『倉稲魂命』ウガノミタマノミコト・穀物特に稲を司る神。転じて福の神とされ弁財天と同一視される。又《白蛇》の姿で財宝神として崇敬を集めている。

東殿：『天照大神』アマテラスオオミカミ・皇室の祖神。

西殿：『邇邇杵尊』ニニギノミコト・天照大神の孫、皇室の祖先。

市川文珠　表門神社宮司　市川行治